

出光佐三対談集

永遠の日本

二六〇〇年と三〇〇年

出光佐三対談集

永遠の日本

二子六首集之三首集

平凡社

いでみつさぞう

出光佐三略歴

明治18年（1885）福岡県宗像郡赤間町に生まれる。同42年神戸高商（現神戸大）を卒業し酒井商会に入店。44年門司に出光商会を設立。昭和15年出光興産株式会社と改組し社長に就任。同41年会長、47年店主となり現在に至る。

主著 『人間尊重五十年』

『働く人の資本主義』

『マルクスが日本に生まれていたら』

『日本人にかえれ』

出光佐三対談集 永遠の日本 —2600年と300年—

昭和50年6月20日 初版第一刷発行

昭和50年10月20日 第五刷発行

著者代表	出光佐三（出光興産店主）
編者	出光興産株式会社 店主室
発行者	下中邦彦
発行所	株式会社 平凡社教育産業センター 東京都千代田区西神田3丁目1番6号
発売元	株式会社 平凡社 東京都千代田区四番町4番地／郵便番号 102 振替 東京29639／電話 03-265-0451

印刷 東銀座印刷出版株式会社

製本 株式会社石津製本所

© 出光佐三 1975 Printed in Japan

永遠の日本

発刊に際して

日本の青年へ

出光 佐三

私はこの十数年来、講演する場合の演題は、いつも「日本人の世界的使命」ということに決めております。これはどういうことかと言えば、今、世界は対立闘争で行き詰まっております。第二次大戦後、世界の永遠の平和と人類の福祉を目標につくられた国際連合は、組織としては、もうこれ以上大きいものはないというほど、完全なものができておりますが、その実態は、平和と福祉を実現できないのみでなく、ますます微に入り、細にわたって混乱は激しくなるばかりです。

もしここに、核爆発という神様がなかったならばどうなりましょうか。神様が高いところからにらみつけて、お前たちの心得が直らなければ全滅させるぞ、といっておられる、そのもとでやっと平和を保っているというのがいまの世界のあり方ではないかと思えます。この核という神様がなかったならば、今の世界はもう混乱に混乱を重ねて、各地で収拾のつかない大戦

争、大混乱が起こっていると思うのです。

それでは、今日の世界の混乱はなぜおきているのでしょうか。ここで忘れてならないことは、交通、通信が非常に発達して、一日で世界中をまわるほど、世界が時間的に狭くなっているということです。今の世界は神奈川県とか埼玉県とかの広さのところに、百以上の異民族が雑居している形ですから、対立闘争の思想では、うまくゆくはずがありません。今や人類が従来の思想をまったく転換しなければならぬ時代に入っているということです。そうしますと、今日では外国の権利思想、個人主義、対立闘争の思想は、もう時代おくれのものであり、そこに浮かびあがってくるものが、日本のお互いに譲り合い、お互いに助け合うという「互譲互助」、「お互い」という道徳のあり方ではないのでしょうか。「お互い」ということで解決できないものはなに一つありません。

そしてこの「お互い」という道徳をもっているのは、日本民族だけでありますから、今、世界の人びとが熱望してやまない平和、福祉を打ちたてるために日本人は特別の大使命をもっているということです。

それでは今の日本人が果たしてこの大使命を果たすに十分な姿になっているかといえば、残念ながら、日本人自身が自分の姿を見失っている。日本というものがわからなくなっています。だから、まず、日本人が今の日本人ばなれした姿を改めて、一日も早く本来の日本人に、

すなわち、「お互い」という道徳のあり方を身につけた日本人に立ち帰らねばならぬということから、私は「日本人にかえれ」と言っているのです。

ところが、面白いことには、外国人の方が日本の本當の姿を理解しているということです。これは最近のことですが、昨年五月、フランス政府の代表で日本の国賓として来日されたアンドレ・マルロー氏であります。マルロー氏は、ご承知の通りフランスの世界的文学者であり大政治家でありますが、フランスを出発する前に出光にだけは特に会いたいと希望しておられたそうで、私はそのマルロー氏と出光美術館で三時間ほど対談しました。

マルロー氏はこう言われるのです。まず、「永遠の日本を愛す」と。それから、日本の切腹（マルロー氏自身、外国人の使う「ハラキリ」の語を用いず、敬意をこめて「切腹」と語っているのである）の意義を高く評価する。これは外国人は礼讃ではなく、だいたい罪惡とみるのに、マルロー氏は武士道を理解し、切腹を礼讃する。それから、皇室の尊嚴をたたえ、非常な敬意をもっている。それから「真の日本人が真の國際人である」という。そして最後に、「日本の芸術には対立がない、日本以外のわれわれの芸術には対立がある」といっておられました。

そこで、私がマルロー氏に質問したことは、「永遠の日本ということはどういうことです。日本は皇室を中心として二千六百年以上続いている。日本以外の国は、英国は五百年キン

グが続いているけれども、ほかの国は三百年ぐらいで支配者が代わっている。いかなる国でも三百年でかわっている。日本でいえば足利幕府、徳川幕府などがそれに当たるわけで、三百年で代わっているが、日本の皇室はちゃんと二千六百年続いている。いままで二千六百年も続いているということは、これから五千年も一万年も続くということではないですか。だから「永遠の日本」ということを感じるんじゃないですか」と言ったら「そうだ」と言っていました。私どもが子供のときには「日本は世界無比の国体である」と言っていました。二千六百年、皇室を中心として、永遠に続いている。こういう国は世界にないから、世界無比ということを、われわれ子供のときにはよく言ったり、聞かされたものです。それでは、なぜ「永遠の日本」ということになるかというと、これは、私の考えなんです、外国のエンペラー、キング、国王、皇帝は武力をもって支配している。外国のエンペラー、キング、国王、皇帝は武力をもって支配している。外国のエンペラー、キング、国王、皇帝で鎧兜をつけていないものはありません。そしてすべて要塞地帯のようなたてこもって、武器をもって自分を保護している。そして一方では国民を搾取して、豪華な金殿玉楼に住み、ぜいたくの限りをつくしている。こういうふうに武力によって支配しているから、三百年しか続かない。

日本は武力ではない。日本の天子様あるいはお公家さんで、鎧兜をつけている人はありません。ということは武力をお使いにならないということです。それではなにをお使いになっ

たかといえ、それは道徳、徳の力です。日本の皇室は、京都の御所を見ればわかるように、平地に無防備で、しかもきわめて質素に暮らしておられる。平地に無防備でおられるということは、これは、人間の徳なんです。徳ということは外国にはありません。日本独特のもので、国民は皇室にすがっておれば、生命も安全であるし、なにかのときは救ってくださるし、財産も没収されるようなことはない。皇室はご自身もきわめて質素にお暮らしになっているから、国民の財産を没収なさる必要がない。生命、財産の安全が皇室によって守られているということは、国民にとっていちばんありがたいことで、国民は皇室に対して「ありがたいでございます」という感謝の念をもつことになります。ここに日本人の「恩を知る」とか無我無私、互譲互助、犠牲心というような独特の国民道徳が出てきたわけです。外国では、いつも武力で征服されて搾取されているから、そういう征服者に対し、国民が「ありがたいございます」という気持ちをもてということは無理です。むしろ反対に、我々にも自由があります、権利がありますと主張することとなり、頼るものは自分だけしかないということから、ここに外国の個人主義、権利思想がでてきたのも当然であります。

マルロー氏はこの皇室の徳の姿によって日本が二千六百年続いているということを見て、「永遠の日本を愛す」と言っているわけです。マルロー氏が日本の皇室に対し深い尊敬の念をもっているということも、これはもう当然です。

それから切腹のことですが、これはキリスト教からいえば、切腹は非常に罪惡ということになっております。その切腹をマルロー氏は礼讃する。私はそれをこう解釈しております。『永遠の日本』というようなものを、生命がけで守れということではないか。それに傷をつけるような人は切腹して申し訳けをする。それが切腹を礼讃するマルロー氏の考えではないかと思ひます。『永遠の日本』を生命がけで守れとマルロー氏は言っているんだらうと思ひます。

それから「真の日本人たるものが真の国際人である」ということは、互譲互助というような道徳をもっている日本人こそ、世界の平和、人類の福祉を実現することに大きな貢献をする民族だということを言っていると思ひます。

最後に「日本の芸術には対立がない。日本以外の芸術には、対立がある」という。これも私なりに解釈してみると、芸術は非常に高い目標をもっているが、外国人は個人主義、権利思想だから、自分というものがある。だから、自分を無にすることがないから、どこまでいっても個人を主張し、対立が残る。それから上にいって一致するわけにはいかない。ところが日本人には自分を離れるという「無」の考えがある。自分を無にして芸術をつくれれば、そこに対立はあらわれない。言葉の真意をとれば、おそらくそんなことではないかと思ひます。

こういうマルロー氏の意見にくらべて、今の日本人はどうかといいますと、戦争に負け外国の思想にかきまわされてしまつて、日本の真の姿がわからなくなつています。マルロー氏のよ

うに、かえって外国のほうからが、真の日本の姿が見えるというような不思議なことになっているように思います。

しかも、これはマルロー氏だけに限らず、私がこの十年来、私を訪ねてきたいろんな国の人びとと話をしてみても、同じことが言えます。私が日本民族のあり方を話しますと最後にはみな理解し、納得して帰ります。

本書は、外国の方々と私の対談の中から何編かを抜粋編集しておりますが、これからの日本を背負う青年たちに、日本人とは何かということをしつくりと自問自答してもらいたいというのが私の希望です。その材料の一つに本書がなれば幸いです。

昭和五十年六月

『永遠の日本』によせて

アンドレ・マルロー

一九五八年、文化大臣として私が日本を訪れ、天皇陛下にお目にかかったときのことである。「武士道をもった日本と、騎士道をもったフランスとが、どうしてお互いに理解しあえないことがありましょうか」と私が申し上げると、陛下は「しかし日本に来て、武士道を身につけた日本人に会われましたか」と仰せられ、このご反問に私はひじょうに深く印象づけられた。

このたび、あらたに訪日するにあたって私は、日本大使館を介して日本の若者たちを集めてもらい、語りあったが、そのおり、神風特攻隊について質問すると、あれは古いものだと言いきっていたのには驚かされた。

私自身に関していえば、私は《カミカゼ》を尊敬している。そして、それと武士道とがどのように結びつきえたのか、さらに武士道と禅がなぜ結びついたかと自問してきている。禅と言えば一九六三年にパリのプチ宮で私は、文化相として仙厓の禅画を大量に展観せしめたが、今

回、出光美術館でふたたびその名品に触れえたことは私の大きな喜びとするところである。三十年來の私の美術論『神々の変貌』の最終巻がいよいよ今秋に刊行されるところだが、そこで私は始めて自分の著述中において仙厓をとりあげ、禅芸術と西歐美術との対比にふれることになるであろう。

どう考えてみても、武士道が武士教育学なるものから生まれでたとは考えられない。そしてそれと同様に、こんにち、《人間》が、教育学という科学からは育ちえないことは、すでに瞭然なのである。そもそも科学は、十九世紀には人類にひじょうに大きな約束をあたえるかのごとく思われたが、人間形成にかけてはまったくの無力であることが露呈されるにいたったのである。

出光佐三氏は「世界は《人》の世界と《物》の世界とに分かれ、日本は《人》を中心とした世界である」と言われたが、ともかくヨーロッパが物につまずいたことは事実であり、それというのも科学は結局のところ物にたいしてのみはたらきかけるものだからである。

出光氏はまた「黄金の奴隷になるな」を始め「モラルの奴隷になるな」に至るまでの、要するに「人間が人間以外のものの奴隷になるな」の《八戒》を示されたが、このうち「数の奴隷になるな」の一項は、票数の差で政治決定することの愚かさをはっきりした現在、そこから取りのぞいたらいかと思われるほどである。このたびのフランスの大統領選挙で見るように、

X

一パーセント以内の差で大統領が決められるようになっては、すなわち党利党略によって真偽が分かれるようになっては、デモクラシーも、おしまいなのだ。

「六十年間の実行にもとづく」という出光氏の会社のあり方が、国家にもあてはまりうるかどうか、私としては知りたいところである。それというのも、いかなる国も、すぐれた個人の方法を国家に適用しえたところはないからで、その意味で、ド・ゴール將軍はそれを望んで、ある程度その実現に成功した人物というべきだった。

いずれにせよ、出光佐三氏とその会社の優れたいき方が、国家に、また世界に適用されることを、私は心から望んでいる。

それにつけても、未来の若者を信ずる、という氏の考えは正しい。私も同じ信念を抱いている。私が会った日本の現代青年たちは、神風特攻隊を悪だと言っではいたが、しかし、日本の歴史についてはよくそれを知っていた。

けだし、国亡びるときは、その国民がみずからの歴史を忘れるときにほかならないからである。

本序文は昨年（昭和四十九年）五月、フランス政府特派大使として来日されたアンドレ・マルロー氏が、同月十七日、出光美術館を訪ね、出光佐三氏と親しく語りあったときの筆録からの抜粋で、本年五月、竹本忠雄氏（日本ユネスコ協会連盟事務局長）がフランスにアンドレ・マルロー氏を訪ねたときマルロー氏の快諾を得て本書の序文として掲載したものである。

目次

発刊に際して ― 日本の青年へ

出光佐三

『永遠の日本』によせて

アンドレ・マルロー

日本人の心

S・アルチノフ

1

R・ドア

F・マライニ

高橋正雄

竹藤 寛

出光佐三

人間尊重の教え 苦難の十年 「資本は人なり」 商人開眼 命拾い

書かれたモラルと書かれざる道徳 神社と墓

モラルの行き詰まりを救う日本の道徳 「お互い」の時代 自衛隊論

ソ連と出光 平等か公平か 利己か愛他か 「卒業証書を捨てよ」

定年制は人間侮辱 愛国心について

世界平和は「お互い」の精神で

A・ベイ

J・ピタウ

高橋正雄

橋本 武
出光佐三

日本は好戦国か 菊と刀 宗教と道徳 個人主義と「お互い」
明治憲法・教育勅語 「お互い」の石油事業 「無駄のない経営」

国際交流は人間の「輪」と「和」から

I ・ ラティシエフ
S ・ ビシュワナタン
J ・ K ・ フィッシャー
V ・ カーペンター
A ・ ベイ
高橋正雄
出光佐三

和をもって主となす 日本民族の中心に流れるもの

魅力的だが仲間入りがむずかしい日本社会 日本のはきは地方に残る

日本人とアジア人 人間の「輪」 人間らしい過ちは責めないほうがいい

資本主義・社会主義・共産主義の長短を取捨選択せよ 株式会社を否定

書き人知らずの日本憲法 「人の国」 日本と「物の国」 アメリカ

見失われた日本 憲法改正は必要か 戦争の原因は軍閥

教育の「育」が大切